

ゆる迫害を事ごもせず、隱忍持久遂に三年三ヶ月の後漸く夙志を達し以て宗門の墮落を永遠に匡救した教界の偉人であつたが、從來其の事蹟を傳へるものは極めて少く、僅かに洞上宗統復古志、卍山廣錄卷末鷹峰和尚年譜に載つてゐる位のもので其の事蹟を系統的に研究したものは未だ見なかつたのであつた。是れ著者が本書を編纂された所以である。全編を上下二卷に分ち上卷を序説、卍山禪師の出生と其時代、父母及庭訓、師承及道業、道交、演法講筵、住持職たりし寺院、開祖に推されたる寺院、嗣法資、下卷を曹洞宗統の革幣、宗弊革正運動中源光庵に寄せられたる禪師の書簡並に其考察、附、卍山禪師書簡小録並に其考察、外護及知己、禪師の人物、文藻及卍山廣錄、禪師の筆蹟、示寂、遺跡源光庵、逸話の十八章に分ちて禪師の事蹟を詳細に叙述し、附録として洞上宗統復古志につきて、禪定寺住訪録、卍山會記事が載せてあり卷首には禪師年譜及び法系が掲げてある、就中宗弊革正運動中源光庵に寄せられたる書簡並に其考察、書簡小録並に其考察には書簡の全文を掲げて一々考證を加へてあ

つて大に讀者の參考となるもので、本書は當こ佛教史家にこつて必讀の書であるのみならず一般教界の人々にも裨益するところが多からう。(菊版三三四頁、京都鸚鵡源光庵内卍山會發行、價三、五〇)(以上松野)

蓮如上人傳の研究 佐々木芳雄著

蓮如上人は單なる眞宗中興の祖に止らないで、我が室町時代に雄飛した宗教的偉人であり、國史上の大立物でもある。隨て其教俗二方面に於ける活躍の考察は興趣深いものがある。著者は若くして夙に上人傳の研究に志し從來公にせられた傳記類や先輩諸氏の研究論文を讀破し、更に諸國の行蹟を遍歴する事多年、一々出據を訂し乍ら世間未知の新史實を探訪して著はされたのが即ち本書である。前後兩編に分ち前編には上人の一生として、生立ち修學巡化、山科本願寺再興、諸國門徒と坊舎の創立、大阪坊舎の剋建及び入寂等、後編には上人の事蹟中目星しいものを選んで御文の撰述、教團の膨脹と其統制子女及び門弟、一向一揆と上人の四章を收めてゐる。就

中上人に關係ある寺院・子女・門弟については從來の説を正して新事實を發表して教線擴張の研究に資し、上人ミ一向一揆ミについては上人に煽動の意志が無く其要害の地に城廓構への坊舎を建立されたのは時代の反映に過ぎぬので消極的防禦工事だミして、帖外御文等の眞偽判定をして居る。御影・筆蹟・歌詠・教義の方面は要略に隨つてゐるけれども其風采は充分に表れてゐる。上人傳の研究者は勿論眞宗史・教會史・室町時代史の研究者に裨益するところ尠しませまい。(菊版三三四頁、京都中外出版株式會社發行、價三、三〇)(井川)

●南 國 史 話

文學士 川島元次郎著

本書は故川島氏が大正八年より同十一年まで長崎高等商業學校教授として在任中その専攻の見より南國各地に旅行して實地研究を試みられた際の餘業もいふべきもので永く筐底に遺されて居つたものを今回出版されたものであつて或は紀行に或は考證に氏の得意させる海外貿

易史に關する博識を以て輕快に書き綴られたもので、鷹島の元寇史蹟、長崎港外の瞥見、長崎ミ諏訪神社、悲劇「中秋の月」、呪はれたる三百年、聖山は何處、最初に試みた上海貿易、南蠻船を迎へた横瀬浦、南蠻船に見限られた平戸港、平戸のじやがたら文、的山大島の一夜、加藤清正の外國貿易、唐船に絡まる坊津の盛衰、山川ミ大迫文書、錢五の密貿易船の行方を尋ねて、歌から見た琉球の十六篇の趣味豊かな史話より成つてゐる。文章は流麗で且つ隨所に興味深き圖版を挿入してあつて讀者をして少しも倦怠を感ぜさせない。(菊版三六八頁、東京平凡社發行、價三、二〇)(松野)

●朝 鮮 史 話

文學博士 幣原 坦著

本書は著者が専攻する朝鮮史研究の傍に成りたる朝鮮史話にして都べて二十一話より成り、日鮮關係の沿革略は著者平常の研究を平易簡明に略述したるもので、先づ朝鮮史概説ミ謂つた貌であるが第二話の朝鮮における箕